

ネットワーク族のエクリチュール

小田 淳一

(^_^)	(^_^);	(;_;
スマイル	冷や汗	泣く
n(._.)n	(._.)y-...	ø(._.)
陳謝	一服	メモる
ヽ(^.^)ノ	(^^);	(.^.)ノ~^
パンザイ	啞然	別れ

共通の言語や思考様式、また帰属意識の存在が民族の定義における主要な要因であるならば、この定義の些か強引なアナロジーに基づいて、現代には、「ネットワーク族」と呼ぶにふさわしい種族が存在している。それは電子の網^{ネットワーク}の上に住まう種族のことである。

ネットワーク族といっても、ネットの利用に際して、仕事上の文書のやり取りや必要な情報の入手に重きを置く人々は含まれない。不特定多数の見知らぬ相手と積極的にメッセージを交換し、しかもそれが彼のコミュニケーション全体の中でかなり大きな比率を占めている人々のことを指す。

網の上は本質的にエクリチュールのみの世界である。しかも多くのネットワーカーは自らの名を口にすることを頑なに忌避して、匿名でメッセージを交わし合う。画像情報や音声情報のやりとりは例外として、すべてが文字言語によるコミュニケーションで成立している。その結果、これらの網の上では時折、一風変わった文字言語の用法が見られることになる。

その一つは文書形式の奔放さである。厩大な量のメッセージが飛び交う中では、杓子定規の文字数×行数の書式は「受けない」。マラルメが固執した「言葉の星座構造」とまではいかないが、エリュアールが詩に見出す「沈黙の余白」に類似したものは随所に見られる。網の上のメッセージは語の配置において常に詩的言語の性質を帯びているのである。

次に文字を用いて「文字」を書く、あるいは「絵」を描くことである。文字で文字を書くのは大型計算機のプリントアウトで利用者番号などに用いられているお馴染みのお遊びであるが、「絵」の方はなかなか興味深い。勿論、文字通りの絵もあるが、これは画材が岩絵の具の代わりに文字であるというだけのことである。最も特徴的なのは、書き手の感情的判断等を象形化した絵文字が、表音文字や更には意味も音も持たない特殊記号の組み合わせによって「書（描）かれている」ことである（上の例を参照）。これらは、絵文字と表意文字（あるいは表文文字と表語文字）の間にあるとする方が妥当かも知れないが、絵文字、表意文字、表音文字という伝統的な文字法の発展段階をあたかも遡行しているかのようである。これはメッセージにおける擬音語、擬態語の多用とも通じるものであり、音声中心主義によって現前性を奪われたエクリチュールに少しでも現前性を与えようとするネットワーク族の無意識的な（あるいは意識的な）試みかも知れない。それどころか、ネット上で知り合った者同士が実際に集まることを「オフライン・ミーティング」と呼び習わすことは、ネットワーク族にとって、オンラインにこそ現前性が充溢していることの証左なのである。

様々な社会機構が電子化した時代を象徴するコミュニケーション形態の中に、絵文字を用いて詩的にメッセージを交わすという、一種独特の現象が見られることは、パロールの地位をようやく篡奪したかに見えたエクリチュールの更なる一面を表わしているのかも知れない。